

星をつなぐ翼

CGFREEから生まれた物語



夜になると、まぶしい光でいっぱいになる街に、一羽の鳥が暮らしていました。

鳥の大きな巣には、毎晩たくさんの客がやってきました。

笑い声。歌声。鳥の名前を呼ぶ声。

鳥は、このにぎやかな毎日が、ずっと続くと思っていました。





ある日、信じて巣を任せていた者が、蓄えた木の実を持っていきました。

そばにいた者も、残った宝物を持っていなくなりました。

鳥は、故郷の小さな庭へ帰りました。

庭は、高く冷たい壁に囲まれていました。

門はあるのに、怖くて外へ出ることもできませんでした。

誰かの足音がすると、胸が苦しくなりました。

小さな翼では、空へ飛ぶこともできませんでした。

「この鉢を、一緒に運んでくれないか」
声をかけたのは、年老いたカメの庭師でした。
何をなくしたのか。なぜ帰ってきたのか。庭師は何も聞きませんでした。
鳥は土を運び、枝を拾いました。
話せない日も、隣には庭師がいました。
少しずつ、庭で過ごす時間が長くなりました。





ある日、庭師は古い木箱を開けました。
庭で何年も拾い集めてきた、色も形も違う羽。
庭師はその羽をつなぎ合わせ、一組の大きな翼を作りました。
「これは、おまえにやろう」
飛べない鳥は驚きました。
「でも、ぼくは飛べないよ」
庭師は笑って答えました。
「飛べるかどうかは、風に聞いてみればいい」



鳥は初めて、高い壁の向こう側を見ました。

知らなかった道。

知らなかった森。

遠くに光る川。

飛んでいるわけではないような、本当に飛んでいるような、不思議な気持ちでした。

鳥は翼を背負い、庭のいちばん高い丘に立ちました。

怖くなって、何度も引き返そうとしました。

それでも鳥は、ほんの少しだけ前へ進みました。

そのとき、庭の向こうから風が吹きました。

風はつぎはぎの翼を持ち上げ、鳥の身体を、ふわりと空へ運びました。



鳥は、飛んだ先の景色を絵にしました。
夜空で見つけた一つ星を、絵の隅に小さく描きました。
その星を木で作って金色に塗り、ひもを通して、一つは首にかけまし
た。
絵を貼ったのは、あの壁の外側です。
ある日、鳥は新しいお知らせも貼りました。
「日曜日、原っぱで。この星をプレゼントします」

来てくれるだろうか。

鳥は星をたくさん用意して、原っぱへ向かいました。

そこには、百もの仲間が待っていました。

「いつも、空の絵を見ているよ」

鳥は、一つずつ星を手渡しました。

仲間たちは、その星を首にかけました。

ただ楽しく飛んでいただけなのに。

自分の知らないところで、こんなにも届いていたのです。





「ぼくも、飛んでみたい」
仲間たちも羽を集め、思い思いの翼を作りました。
速く飛ぶ者。花の上をゆっくり進む者。
地面でお弁当を広げる者もありました。
鳥は、見つけた景色を誰かと話す楽しさを知りました。
次はどこへ行こう。帰り道にも、笑い声が続きました。

けれど、風はいつもやさしいとは限りませんでした。
ぶつかって、けがをした仲間がいました。
もう二度と、会えなくなった仲間もいました。
いつもの原っぱに、一つ空いた場所。
鳥はそこを見つめました。
みんなで笑って帰れるように、何かできないだろうか。



「みんなを守れる服を作ろう」

仲間たちは、体を守る服を着ずに飛んでいました。

ぶつかったとき、やわらかく受け止めてくれる服。

翼を動かしやすく、着るとうれしくなる服。

鳥は何枚も絵を描きました。

仲間に見せては描き直し、作ってくれる者を探しました。





「この服なら、私に作れます」
細身のキツネの仕立て屋が、絵を広げて言いました。
「材料をそろえるには、たくさんの羽と引きかえる必要があります。
服を欲しい方から、先に預かってきてください」
鳥は仲間たちに話しました。
「できあがったら、必ず届けるよ」
仲間は、蓄えていた大切な羽を託しました。



「これだけでは、作れません」
羽を届けるたび、仕立て屋は言いました。
鳥は自分の蓄えも出し、朝も夜も、さらに羽を集めました。
ここでやめたら、みんなの服はどうなるのだろう。
風は吹いていました。けれど鳥は、もう景色を見ていませんでした。



「まだ、足りません」
鳥は、背中の翼に触れました。
庭師がくれた、あの翼です。
鳥は長い間うつむいて、それを外しました。
「これで、みんなの服を作ってください」
仕立て屋は翼を背負い、預かった羽を抱えると、空の向こうへ飛び去りました。
戻ってはきませんでした。



翼も、羽も、届けるはずの服もありませんでした。
「ぼくを信じて、預けてくれたのに」
鳥は、約束した一人ひとりの顔を思い出しました。
夜が更けても、そこから動けませんでした。

「この星を、覚えているかい」
顔を上げると、大きな青灰色の鳥がいました。
手には、原っぱで配った小さな星。
角がすり減るほど、大切に持っていてくれた星でした。
「ぼくは、きみが楽しそうに飛ぶ姿と、きみの描く空の絵が好きだった」
「服はなくなった。でも、きみまでなくなったわけじゃない」
大きな鳥は、そっと一枚の羽を差し出しました。
「もう一度、飛べ。きみの見つける空を、また見せてくれ」





「仲間に返す羽も、ほかに失った分も、いったんぼくが用意しよう」
「一人で抱えなくていい。また、一枚ずつ集めていこう」
鳥は助けを借りて、仲間のもとへ向かいました。
「約束の服を、届けられなくてごめんなさい」
預かった羽を返し、鳥は大きな鳥のもとで働き始めました。

鳥は働き、羽を返しながら、自分の翼のための羽も少しずつ集めました。

落としていた星を拾い、ひもを結び直しました。

ある日、新しい翼が風を受けました。

やっぱり、飛ぶのは楽しい。

「服は作れなかった。でも、飛び方を一緒に練習することならできる」

鳥は大きな鳥に話しました。

「みんなで練習する場所を、作りたいんだ」





大きな鳥が、広い原っぱを用意してくれました。
鳥は仲間と目印を並べ、休める場所を作りました。
初めての仲間が、翼を広げたまま立ち止まっています。
鳥は隣へ降りました。

「低いところから、一緒にやってみよう」
飛ぶ者。休む者。おしゃべりをする者。
鳥も笑って、また翼を広げました。
ここは、コフリーの空。

鳥はひと休みして、コフリーの空を見上げました。
空を飛ぶ仲間たちの首で、小さな星がきらきら揺れていました。
あの日、原っぱで手渡した星です。
陽の光を受けて、ひとつ、またひとつ。
まだ昼間なのに、そこには満天の星空が広がっていました。

一人でいたころには、考えもしなかった景色が、そこがありました。

だから鳥は今日も、
誰よりも楽しそうに空を飛びます。

その光が、まだ飛べない誰かの
最初の星になることを、
鳥はもう知っているから。

